

「遅くなってすみません」

へらりとした表情は、腹が立つほどいつもと変わらない。

酒屋で一杯引っ掛けてきたらしい泰三の首筋に、赤い跡を見つけた私は、そこから目を逸らせなくなった。

泰三が扉を閉め、土間から部屋に上がる。ここは、私たちが二人で暮らしている四畳半の部屋だ。布団を敷いたら、それだけでいっぱいになるくらいの大きさだが、隣の隣は同じような部屋に五人家族が住んでいるので、文句は言えない。

泰三の脱ぎ散らかした草履を揃えながら、私は首元の印が気になって仕方なかった。

「泰三、首のそれ…」

「んえ？ 俺の顔に、なんかついてます？」

泰三は疲れた様子で畳に突っ伏していたが、笑顔で振り向いた。

「……なんでもない」

「え～、なんでもないことはないでしょ。あれ？

ご飯、待っててくれたんですか？ すみません」

そういわれて私は俯いた。そんなことじゃないのに、と思うのに、うまく言葉にできない。泰三は私の態度に気づくと、寝転んだまま、こちらに身体を向けた。

「ありゃ、もしかして、けっこう怒ってます……？」

私は泰三の目から逃げるように顔を背け、土間に降りて瓶から水を茶碗に注ぐ。

「別に、怒ってない」

水の入った茶碗を差し出すと、泰三は一気にそれを飲み干した。

「ん〜と。明日は片付けします。あと洗濯とご飯炊きます。え〜とほかには…」

「いや、本当にいいから……」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、泰三が後ろから私の肩にふわりと腕を回した。

「うそつき」

耳元でそう囁かれて、私はぞくりとした。肩をすぐめると、泰三は私の首元に頭を擦り付けてきた。

首元に泰三の髪が触れて、くすぐったい。

「なんでもないってことはないでしょ？ 挽回  
させてくれないし、言い訳もさせてくんないの  
……？ ひどいなあ、宗十郎さんは」

そこまで言われて、私はだんだん腹が立ってきた。怒りに任せて、泰三を振り払う。

「首！」

「え？」

私は泰三に柄鏡を差し出した。ぽかんとしていた泰三はそれを受け取り、自分の首元を映すと、ようやく思い出したように言った。

「ああ。これはね、酒の席で仕事場の仲間との腕  
相撲の勝負に負けて、ちゅーってやられました」

私は力が抜けた。なんだ、そんなことか、とホッと  
とする。私の表情を見た泰三が、ちょっといたずら  
っぽく笑った。

「ひょっとして、宗十郎さん、やきもち妬きました？」

私は顔に血が上る。

「別に」

と言いかけて、言葉に険がないよう言い直す。

「お前は……お前の好きなようにすればいい。  
お前にはもうすでに、たくさんのことをしてもら  
っているから」

これは単なる建前ではなかった。泰三は私を地  
獄から連れ出してくれた。それだけで、本当はもう

十分なのだ。

泰三に、これ以上何かを求めるのは、いけないことだと、私はいつも自分を戒めていた。

泰三が背後でひとつ息をつく。

「……宗十郎さん。俺はいつも、俺の意思で動いてるだけだよ」

私はなんと答えていいのか分からず、目線を下に遣る。何度もそう言われている。言葉では、わかっている。でも、ふと不安になる。泰三がいつか自分から離れることが。本当にそうになったら、私はきっと壊れてしまう。

だったら、最初から部をわきまえていた方がいいと、そう考えてしまうのだ。

私は、無言で部屋を横切ると、隅に畳んであった布団を引っ張り出しにかかった。

「……面倒なことを言ってすまない。お前も疲れたろう、今日はもう休もう……」

と、泰三が背後から私の腰に、するりと手を回した。その腕は優しく、ぎゅっと拘束しているわけではないのに、動けない。

「宗十郎さんは、わがままなのに、肝心なところで、わがまま言うのが下手なんですよねぇ」

「なんだそれは。この腕を離せ」

「……嫌だっていったら、宗十郎さん、ますます怒っちゃいます？」

私は抗議の意味を込めて振り向くと、泰三はや

わらかく笑っていた。泰三は後ろから、やさしく私の体を抱きしめると、首元に口づけを落とした。

「んっ…」

ぴくりと身体が跳ねる。思わず反応してしまったのが悔しくて、私は顔を背ける。泰三は私の胸の下あたりを優しくさすりながら、甘えるように言った。

「最近、なかなか休み合わなくて、ご無沙汰ですよ。えーと、前にしたのって、一月くらい前ですっけ」

「そんなに経ってない。二十三日くらいだ」

「え、日数、数えてたんすか？」

「ち、違う。たまたま覚えていただけだ」

「……宗十郎さん、明日休みですよ？ ちなみに、俺も休みなんです」

「だから何だ、お前は働き詰めで疲れてるだろ、今日は早めに……」

「やだ」

泰三はそう言うと同時に、私をふわりと抱き上げた。泰三が足で蹴飛ばしながら敷いた布団の上に、私はゆっくり降ろされる。そのまま、泰三が私に口づける形で、押し倒された。

「ん、ふ……」

「……今日、いいですか？ 気分じゃない、とかないです？」

私は、泰三の優しい声に、胸の奥がじんわりと解

けていくのを感じる。

泰三はいつも、する時に、こうして私の気持ちを  
確認する。でもそれが、今日は少し疎ましい。こう  
聞かれてしまったら私は、それ以上強がることが  
できなくなる。尊重してくれている。その感覚は、  
本当にかけがえがなくて、他のどんなものより、甘  
美だ。

私は、覆いかぶさったままの、泰三のたくましい  
腕に、自分の手を添わせる。

「……好きにしろ」

「はい。ご主人様」

泰三は満足そうにそう囁くと、耳元、頬、鎖骨、  
肩に順に口づけを落としていった。

「ん……」

泰三が啄んだ部分が、一瞬で熱を持ったように、  
甘い刺激を残していく。

——本当は、私が泰三に触れたくないときなど  
ない。

でも、泰三だって疲れているはずだ。ひと月ほど  
前から、大型船の荷卸し、倉庫番、荷積みの仕事を  
請け負っていたのだ。それが今日ようやく終わっ  
たのだから、疲れていないはずはないのだ。

だが。

私がこのところ寂しかったことも、泰三は多分、  
わかっているのだ。

——結局、私のほうが、いつも甘やかしてもらっ

ている。

そうぼんやり考えていると、泰三が私のそばで、  
身体を横にした。

「今日は、してほしいこと、言ってくださいね」

「……してほしいこと？」

「うん……そうだなあ…たとえば…これは？」

泰三が手を伸ばし、私の腋から胸にかけてを、優しくさすった。私はびくりと体を震わせる。

「はあ、やだ……」

私が寝がえりを打ちながら、泰三の方へ身体を  
向ける。と、急に泰三の手が離れた。

「やだ？ 嫌ならやめますよ」

私は切なくて、身体をよじらせる。

「ん、ちがう…」

泰三が熱を帯びた目で私を見つめていた。泰三の掌が、さっきと同じところに、そっと置かれる。それだけなのに、ごつごつとした大きな手の熱が、じわじわと腹の奥を溶かしていくように感じて、私は悶えた。置かれているだけの手かもどかしくて仕方がない。私は切なくて、甘い息を吐いた。

——本当は、もっと、もっと欲しい。でも、それを言うのは、まだ少し恥ずかしい。

泰三が囁いた。

「ね、宗十郎さん。してって言うてみて」

「へ…？」

「練習。わがまま言うための」

泰三が私の胸から手を離した。手を背後に回し、背中から腰をつつ、と撫でる。

「う」

再び身体が震える。触れるか触れないかの、絶妙なところ。泰三は、こういう触れ方が本当に上手い。

「宗十郎さんが気持ちいいと俺も気持ちいいの。分かるでしょ？ それとも、宗十郎さんはそうじゃない？」

泰三が私の手を取り、自分の胸のあたりに持っていく。

顔を上げると、泰三の顔がすぐそこにあった。少し酒臭いが、少し眠そうな目元も、通った鼻筋も、きゅっとしまった口元も、相変わらず、惚れ惚れし

てしまうほど美しい。

——わたしも、触れたい。

私はそっと手を開き、泰三の鎖骨のあたりに触れてみた。

「——っ…」

泰三が少しだけ、息を詰める。私は泰三にも、もっと快感を味わってほしくて、大きな胸に、ついと顔を寄せた。

胸。みぞおち。そしてその下の、すこしやわらかい、へその上あたりに、順に口づけを落としていく。

「宗十郎さん。そこ…やばい」

泰三がちょっと笑いながら、低く、抑えるような声を出す。それだけのことなのに、私の体の奥のほ

うが、ずくりとうずいてしまう。

上を向くと、熱っぽく潤んだ瞳が、私を見下ろしていた。

「まずは、俺からしますね？」

肩から背中あたりを撫でていた泰三の手が、ふいに離れた。泰三は私と視線の合う位置まで降りてくると、私の襟の奥につつ、と指を滑り込ませる。

「ん……ふふっ」

くすぐったいような快感に、私は思わず身体を縮こめた。

「宗十郎さん。もし、ここ…もっと触っていいなら、身体、開いて……？」

＊

泰三の言葉はあくまで優しい。

私は泰三の言葉に従い、おずおずと仰向けになった。ふと、胸が開けていることに気が付いて、私は襟を閉じようとする。

その途端、泰三がその手を無造作につかんで、広げさせた。

泰三はそのまま、胸が露わになってしまっている私の姿を、じっと舐るように見つめ続けた。

「…っ」

美しい泰三の目に、自分の生まれたままの姿が晒されている。

それだけで、恥ずかしくて仕方なくて、涙がこぼれそうになった。体の奥が火照って堪らない。

私は顔を背け、身体を振るようにして、泰三の視線の熱から逃れようとする。しかし泰三は私の腿を足で抑え、それをさせないようにした。

私は訴えかけるように泰三を見つめた。しかし、泰三は眉を少し上げて、静かに微笑むだけだ。

「……っ、泰三」

私はいたたまれなくなっていて、ついに声を上げた。

「ん〜？」

「手を離せっ…あんまり見るな……っ」

「え〜？　なんで？　すごくきれいですよ」

「なにを…」

それが、泰三のいつもの軽口だとわかっていても、頭が沸騰しそうになる。

泰三は、私の両の手を片手で押さえながら、荒い息を吐いた。

「ここも…すごく可愛い……」

囁きながら、空いた右手で、私の胸の赤く尖っている周りを、くるくると指先でなぞる。

「あ、んう…っ」

急な刺激に、身体がびくりと反応する。

「もうこんな赤く、固くして。ここ……そんなに触ってほしかった……？」

「……っ！」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、泰三は

私の胸元に覆いかぶさった。

首と鎖骨に数回口づけてから、そのまま下方に移動する。ちろりと腋の下と胸の横を舐める。続けて、舌をつつ、と横に滑らせていく。

「…っあ、はあっ、あああっ…」

泰三の舌が、ゆっくり、ゆっくり、突起の周りを舐める。その距離はだんだん近くなって、一番敏感なところに、触れるか触れないかのところで止まる。

「ん、う……っ、ん……っ」

焦らされれば焦らされるだけ、期待は強くなっていく。身体の芯までがじわりと熱くなるような快感に、私はくらくらした。

——期待と緊張で、おかしくなりそうだ。

ふいに、泰三の舌が、一番敏感なところに触れた。

「あ、あんっ」

思ったより大きな声が出てしまい、私は恥ずかしくなって唇を噛んだ。

江戸の住まいは隣同士が近いし、木造だから音も漏れやすい。ある程度は仕方ないとしても、自分のはしたない声を近隣に響かせるようなことは、できれば避けたかった。

しかし泰三は、そんなことは意に介さない様子で、そこを責め立て続けた。

「ん、んふ、んうう～っ…っ！」

泰三の舌が、上下左右から、快感の核を押しつぶすように舐る。舌の、ぬるぬるとした感触と熱が、

普段は閉じられている快楽の感覚を、じわじわとこじ開けていくようだ。

泰三は、わざと音を立てて、そこを吸ったあと、歯と舌でそれを挟んで、ゆっくり左右に擦り上げた。

「あ、んう、ふっ…うん、ん、んん～っ……っ」

びりびりと体中が痺れるような快感が、何度も身体を駆け巡る。身体が反り、弦のようにぴんと張り詰める。

しだいに、体中が感じてきて、泰三が何をしているのかさえ分からなくなる。

泰三はしばらくそこを弄んだあと、私の蕩けきった身体の、一番敏感なところに、するりと手を滑

らせた。私は反射的に、泰三の手元に手を伸ばす。

「あ、そこ、だめっ…すぐ、いっちゃう」

「うん。いいよ。俺の手で、気持ちよくなって  
……？」

泰三の吐息交じりの言葉に、私はますます昂る  
衝動を抑えられなくなっていく。

「んっ…あ……っ、はぁっ……だめ、だってえ  
……っ」

先走りで濡れた音が響く。

泰三が、そこをさする手を若干速くした。と同時  
に、私は精を吐いていた。

「はっ…はぁ……っ……」

絶頂と、その後の痺れるような甘く気だるい余

韻が、じわじわと全身を充たしていく。ふいに、泰三が再び、私の乳首に舌を這わせた。私はまた身を跳ねさせる。

「ん！ んーっ…もおっ…やめっ……」

「は…かわいいよ。宗十郎さん。かわいい」

「…っ」

泰三は震える私の胸に、何度も口づけを落とした。

＊

私は泰三の隣に横になったまま、息を整えつつ言った。

「泰三。お前は、私の嫌がることはしないと言うくせに……たまにこうして意地悪をするな……？」

「え～？ そうですか？ でも俺、宗十郎さんのほんとに嫌がることはしないですよ？」

私は、ゆっくり身体を起こした。

まだ身体は火照り、息は荒いままだ。それでも、泰三に触れたい気持ちのほうが強かった。

「私も……お前にもっと、触れたい」

泰三は手枕をし、とろりとした目を細めて笑った。

「どうぞ。宗十郎さんに触られるのが大好きだよ、俺」

泰三は手を伸ばすと、私の頭を優しく撫でる。ふ

いに、愛しさがこみ上げてきて、私は泰三の頬に触れながら囁いた。

「……どこがいい？」

「宗十郎さんが触れてくれるところなら、どこでも」

「……答えになってない」

「だってほんとに全部好きだもん。この小さい手が触れるのも……滑らかなお腹が触れるのも……あと……」

言いながら、泰三は私の足の間に、自分の太腿をするりと滑らせるた。

「ここも……大好き」

「ん…」

腿に触れる温かい泰三の肌の感触に、すぐに意識がもっていかれる。

泰三がさらに脚を深く差し込むと、泰三のものと私のものが触れあった。布越しに、じわりと伝わる熱さがもどかしくて、また体に熱が灯る。

「ん……っだめだ、いまは、私が……ちゃんとお前に……」

私は、ぐいと泰三を押し戻すと、泰三を仰向けに転がした。

「お前は、今は、おとなしくしてろ」

「はあい」

仰向けに寝そべっている泰三の横に座った私は、寝そべった泰三の身体に目をやり、どきりとする。

泰三の身体は私の身体とはまるで違う。いつも重いものを運んでいるからだろうか。胸や腕など、自分とは比べものにならないほど太く逞しく、思わず目を奪われるほどだ。

——やっぱり、おおきいなあ……。

今から、この男に、自分は抱かれるのだ。

そう思うと、ぞくりとして、私は思わず喉を鳴らした、

——この男を、私が、気持ちよく、してあげられるだろうか。

私は泰三の腰あたりに、つい、と指先を置く。そのまま、鼠径部から腿の方へ、控えめに手を滑らせる。

「…っ」

泰三の大きな体が、もぞもぞと動いた。

「……大丈夫か？」

「え…？ うん…なんか気持ち良すぎて……すぐ出そう」

私は笑った。泰三は普段は、ここまで素直には喋らない。多分、少し酒が入っているから、饒舌になっているのだろう。

私は泰三の言葉に、すこし勇気づけられて、泰三の腿や腹に、口づけを落とした。珍しく、しどけなく身体を明け渡している泰三の姿は、妙に色っぽく見えた。

私は指をそっと奥へ伸ばし、根元のふくらみを

優しく転がす。

「……ん」

隆起した泰三のものからは、すでに先走りが垂れていた。私はそれさえ愛おしくて、舌で掬うようにして舐め上げる。

泰三の身体に、一瞬ぐっと力が入ったのが分かった。

私はそのまま唇を開いた。ゆっくりと、熱い隆起を口の中に含み、すこし吸うようにしながら、くびれたところに唇を引っ掛け、丁寧に擦り上げてみる。

泰三は荒い息をしながら、少し上半身を起こす。

「……宗十郎さん……やば……それ……そーゆ

一のどこで覚えるの……」

「別に……お前が気持ちよさそうにしてるのを見て覚えたり……春画本に書いてあったりとかで……」

「学習能力、高すぎだよ…」

私は夢中でそれを咥えていた自分がなんだか恥ずかしくなる。そこから口を離すと、泰三の足の間に移動した。

身体をたたむように正面に屈んで、そそり立ったものの根元に、再び唇を当てる。

私はそのまま、つうっと下から上に舐めたり、音を立てて口づけを落としながら、泰三の反応を見る。

裏筋のあたりにたどり着くと、舌をちろりと当てて、小刻みに揺らしてみた。ここは、『女の一番感じるところと、同じ快感』だと、春画本に書いてあった。

「っう…!？」

泰三が急に体をこわばらせた。手を伸ばし、私の髪を無造作にかき混ぜる。

「……宗十郎さ……っやばいっ…てえっ……それ……っ」

その必死さが嬉しくて、私はますます大胆になる。

カリを唇に引っ掛けたまま、亀頭だけをくるくると押しつぶすように舐める。根本まで口いっぱい

い含んでから、吸い上げるように、扱き上げる。

じゅぷじゅぷと卑猥な音が耳に響くとともに、自分の奥が、一緒にじわじわと熱くなっていくのがわかった。いつのまにか、私の身体の熱も、耐えられないほどになっていて、私は無意識に腿を擦り合わせてしまう。

次第に泰三の手に力が入り、低く押し殺すような声が抑えられなくなってきた。

「ん、——うあ、やば、でる」

急に、それがぐっと喉の奥に入ってきた。それはビクビク跳ねながら、にがい味を口の奥に吐き散らす。

「——ん」

その味は苦手だったが、私はそれを飲み下した。  
味は嫌いだが、泰三のものを飲む、という行為が、  
私にとっては甘美なのだ。

「はあ……ごめんね。宗十郎さん。気持ちよかった。ありがとう……」

そう言って、泰三は少し体を起こすと、軽く口づけをした。それからまた、脱力したように仰向けに倒れる。

「はあ～……」

私は泰三を満足させられたことが嬉しくて、泰三の側に横になると、静かに寄り添った。

＊

「ねえ、宗十郎さんは、どこ触られるのが好き？」

泰三は天井を見ながら、ぼんやりとした声で話した。私はその横に寝そべりながら、泰三の腕に顔を乗せた。

「……改めて言えと言われると、困るな？」

こういうことは、問われて言うとなると、少々気恥ずかしい。私が眉間にしわを寄せて真面目に考えていると、泰三は、ふはっと、ほころぶように笑った。

「そうですねえ。でも聞きたいなあ～宗十郎さんのおねだり」

泰三は私を、優しく抱えて起こすと、正面に胡坐

をかいて座った。

「じゃあさ、さっきみたくな……俺がこれから宗十郎さんのこと触るから、そこが好きなら、好きって言って？」

「なんだか試験みたいで、妙な感じだなあ…ん」

泰三が私の髪を耳にかけた。そのまま、首筋をすい、と撫でる。

私は甘い息を吐く。

「すき？」

「…うん」

しかし、少し考えて、私は言った。

「好き、だが……私も、お前に触れられるのなら、どこでも……」

好きだ、と言おうとしたところで、泰三と目が合う。

「どこでも…何？」

にやりと笑った泰三に目を覗き込まれ、私は自分が言っていることを自覚した。顔に熱が昇るのが分かる。

「……続きは？」

「言わない」

「え～？ 俺はさっき言ったじゃないすか」

「言葉の重みが違うんだ、おまえと私では」

「ひどいなあ～そういう事言うんすかあ？ そんな事言うと、こうですよ」

「わ」

泰三は私をくるりと反対向きにさせると、ひょいと胡座の上に乗せてしまう。体が急に密着して、私はどきりとした。泰三は私の首筋に口づけを落とした。

「ん…っ」

泰三はその大きな掌を、ゆっくりと私の太腿の内側に滑らせていく。

「ここは……好き？」

私は小さく震えながら、何度も頷く。私が内腿をゆっくりと触られるのが、たまらなく好きだということを、もう泰三は知っている。

「ん、はあ……っ」

——でも、まだ、足りない。もっと。もっと、触

れて欲しい。

ふいに、泰三の手が、するりと離れた。その手は私のへその下のあたりに移動すると、そこを指先でくるくると刺激しはじめる。

「ん、ん……」

くすぐったいような、微細な快感に私が身をよじると、泰三が愉快そうに言った。

「ここ、最近弱いよね」

「ん。ん、お前が……するときに、いつも触るからだろう……っ」

もどかしい快感に、思わず身をすくめると、背後に固いものが当たった。私は驚き、同時に少し呆れて、泰三のほうを振り向く。

「おまえ…もう……？」

「ん？ ああ、これ、すぐこうなっちゃうんですよね」

泰三は全く悪びれていない様子で、さっきからうずうずしている、私の敏感な所のそばに、それを擦り付けた。

「っ…ん」

私は身体を振った。その確かな欲の塊に呼応するように、私の身体の奥深くの熱も、じわじわと昂っていく。

泰三はいつも、あまり自分の要求を口にしない。でも、この熱に触れれば、泰三の求めていることが何かは、手に取るようにわかってしまう。

ふいに、泰三は私の唇に、優しく指先を滑らせた。

「この口でしてもらうのも……よかったですけど」

泰三は耳元でゆっくりと、あやすように言葉を継ぐ。舌を弄ぶ、ちゅぷちゅぷという音が、いやらしく耳に響く。私の口の端から、たらりと唾が垂れる。

「おれのここ……宗十郎さんの中が一番感じられます。ここの……指じゃ届かない、奥のほう……熱くてうねってて、ぎゅうって締め付けて離さない……」

泰三は、さっきから弄っている場所を、すこし強めにさする。

腹を撫でる手は熱く、まるで今、泰三に奥を犯されているような感覚に陥る。私は、体の底から湧き出るような快感に耐えられず身悶えた。

「あ、はぁ……っ」

「この、奥の奥……宗十郎さんの、いちばん、感じる……」

泰三の腹をさする指先に、ぐっと力がこもった。

「俺ので、たくさんたくさん、突いて、いじめて……きもちよくしてあげたい……」

「——っ…！」

気がつく、私の体はがくがくと震えていた。外側の刺激と、言葉だけで、軽く達してしまったらしい。

「……っはあっ、はあっ、はっ……」

恥じらいと快感で、震えたまま、私は必死に息を継ぐ。だが、中の疼きは一向に収まらない。むしろ、ますますひどくなる一方だった。

——もっと。ちゃんと。……してほしい。

私は目尻に涙をためたまま、後ろを振り向き、泰三を見つめる。

「どうしたんですか？ 宗十郎さん」

泰三はこういう時、すこし意地悪な笑顔を見せる。私は言葉を発するのももどかしく、軽い口づけでその意図を伝える。

しかし泰三は何も言わず、微笑んだままだ。私の頬に手を触れると、唾液にまみれた私の唇を、親指

でなぞるように往復させた。

「してほしいこと、この口で言ってくれないと、  
わかりませんよ……？」

やっぱり、今日の泰三は意地悪だ。しかも、しつこい。私はあきらめて、体を横にずらすと、泰三の方に顔を向けた。手を伸ばし、猛り立ったままの泰三のものに触れる。

「ん……」

泰三が低く声を漏らす。その吐息と、手で触れているものの熱だけで、腹の奥がまた、ずくりと疼く。私は喘ぐように言った。

「泰三の、これ……欲しい。奥のところに……っ」

恥じらいと、触れて欲しさが溢れて、自然に涙が

出てくる。

泰三は、しばらく、黙って私を見つめていた。

しかしついに、私の体を強く引き寄せると、軽く口づけをしてから、長く息を吐いた。

「……ごめんなさい。宗十郎さんが……あんまりかわいいから。意地悪したくなっちゃった……」

泰三は、もう一度、私をぎゅうと抱きしめると、頬に口づけた。私はぷいとそっぽを向いた。

「……主に恥をかかせて。おまえは本当に悪い従者だ」

「あはは。じゃあ、許してもらえるまで、今日はたくさんしてあげますね？」

「え？」

「宗十郎さんの大好きなところ……たくさんい  
じめてあげる……」

＊

「ん、ふ、はぁっ……っ」

泰三は私を押し倒すと、無造作に身体を重ね合  
わせた。その大きな体に、私は押しつぶされるよう  
な錯覚に陥る。

互いが互いを求め、私たちは獣のように強く身  
体を擦り付け合った。汗にまみれた肌はぬるぬる  
と滑り、触れた部分の熱が、荒い吐息が、さらに互  
いの欲を駆り立てる。

私たちは欲情に突き動かされるまま、貪るように互いの身体を重ねた。

「宗十郎さん、舌、出して……」

私は必死に舌を伸ばした。己の舌が泰三の舌に触れると、やわらかい舌の感触に、組み敷かれた私の身体が跳ねた。私は必死に舌を絡め合わせ、唾液を吸う。

泰三の舌は、もっと欲しい、もっと欲しいと言っているかのようだ。私の歯列をこじ開け、乱雑に私の腔内に入ってくる。泰三の舌が口蓋をなぞる感触に、神経がぞわりと逆立つ。

私達はまるで、一体の獣になったように、お互いに腕を回し、強く抱きしめ合った。快感も欲望も、

天井なしに溢れていく。お互いがお互いの熱を煽り、お互いの感覚を呼び覚ましていくようだった。

「あ……っ」

泰三が、私の着物の前を強引に開けさせる。先走りにまみれたそれが露わになる。泰三は自分のものを合わせて、一緒に掴んでしごき始めた。

「んあっ……！ はあっ……うんっ、あ」

泰三のものが熱くて、ぬるぬるとした手の刺激が堪らなくて、理性が全部、溶けそうになる。

——こんなにも、全身で泰三を求めていることが、露わになってしまっている。

それが、恥ずかしくて、それが…とてつもなく、嬉しい。

「ん、う、ん……っ」

「あ、やば……」

泰三と私はほとんど同時に達した。

＊以下抜粋＊

「んあう…っ！」

ずぶ、とそれが奥まで入った瞬間、思わず大きな声漏れる。体の奥に、電流がほとばしったように、全身がびりびりと痺れて止まらない。

「はは…宗十郎さん、おもしろしてる」

気がつくと、私のそこは、たらたらと精を吐いていた。

「は……なん、でえ……？」

恥ずかしさと気持ちよさが入交り、熱い涙が頬を伝う。

「なんでもいいです。かわいい……」

泰三が震える私の身体に顔を擦りつけ、肩や背中に、優しく口づけを落とす。まるで、大丈夫だよ、愛してるよ、という印のように。

＊

それだけでも堪らないのに、泰三が私の脚を抱えるようにして、奥にぐりぐりとそれを押しつけ、かき回し始めた。

入口のいいところも、奥のいいところも、一度に刺激され、私は思わず喘いだ。

「あ、あーっ……っ!!」

「……どこがいい？」

「っ……ぜんぶ……っきもちいい……からあ……」

私は喘ぎながらも、必死に泰三の膝に手を伸ばした。

「泰三の、好きにして……」

泰三の動きが、ふいに止まった。

「……好きにして、いいんすか？」

いや、それは、程度による、と言おうとしたが、遅かった。

「じゃ、ちょっとだけ……好きにしますね？」

「あ…あ、あーっ、…あうっ！ んうっ」

それはけして強い刺激ではないのに、声を抑えることができない。

身体の感覚がどんどん研ぎ澄まされていく。それによって、普段は感じない、感覚のより深いところが、じわじわと快感に支配されていく。

——なに、これ。

私は耐えられなくなって喘いだ。

「やめ、泰三、だめ、きもちい……そこお……っ…」

「だめじゃないよ、もっときもちよくなって……俺も……っ」

足が震えて力が入らない。泰三の熱い吐息が近くに聞こえた。泰三が背中の下で動くたび、身体の奥までその感触が響いていく。

動きが激しくなった瞬間、中がぎゅっと締まり、膝ががくがくと震えた。

『甘えるのを我慢していたら  
やたらガタイのいいチャラ従者に  
極限までいろんなところを  
とろとろに甘やかされて  
朝まで連続絶頂させられました♡』

2026年9月18日 発行

著者：あざらしくいくい物語

サークル名：あざくい

連絡先：

<https://www.pixiv.net/users/126725645>

表紙の書影撮影・SNS投稿はご自由にどうぞ♡  
上記以外のご利用については  
メールにてご連絡ください。

感想お待ちしております!! ↓マシュマロ↓

